

第二十一章 太平洋戦下の業態

一 敗戦への道

〔大本営陸海軍部発表〕（十二月八日午前六時）帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入
れり（後略）。

日華事変が長引くにつれ、ようやく重要資源の欠乏が深刻になり、政府や軍部はこれが獲得に懸命になった結果、遂に仏印進駐を強行した。アメリカは、日本政府が出先大使宛に発した電報を傍受し、この決定をいち早く知っていたから、仏印進駐が対英米戦の準備であると解し、四月以来日米間で行われていた国交調整も、アメリカがその態度を硬化し、石油をはじめ重要物質一切の対日輸出を禁止するに及んで殆んど徒労に帰した。このため、軍部特に陸軍の対英米即時開戦論に、いよいよ拍車がかかり、その圧力によって、新聞・ラジオは、A（米）B（英）C（中）D（蘭）の包囲陣の強化と、国防の危機を大々的に報じ、英米に対する国民の敵がい心を盛んにあおった。

近衛首相は、陸軍をおさえてアメリカとの交渉継続か、それとも戦争開始かを決定することもなく内閣を投げ出した。そこで後継内閣の首班として東条英機が任命されたが、彼はこれまでのいきさつを白紙に還元して国策を再検

討すると約束しながらも、その実、陸相と内相を兼務し、ひそかに戦争の準備に邁進し、遂に、昭和十六年十二月八日未明のハワイ奇襲攻撃を以って太平洋戦争の火蓋を切って落したのであるが、此の日、わが国が力と頼んでいたドイツ軍がモスコー占領に失敗したのも皮肉と云えば皮肉であった。

先にマス・コミを通じて国民の敵が心をあおった政府は、開戦の翌九日、出版社をあつめて、「世論指導方針」を指令した。これによると、戦略的にわが国が絶対優位にある点を鼓吹すること、わが国の経済力に対する国民の自信を強めさせること、敵国の政治経済並に軍事的な弱点の暴露につとめること、英米に対する敵が心を、一層強固に国民のうちに植えつけることなどであった。これは更に、東条内閣のファッショ体制を強めるため、已に制定されていた「国民勤労報国協力令」に基づいて組織された産業報国会、商業報国会、農業報国連盟、海運報国会、大日本婦人会、大日本青少年団等も凡て内閣傘下におさめ、また文学報国会、言論報国会などをも組織せしめ、組合組織を解消脱皮させ、官僚の指導する戦争協力体制を確立した。

一方経済問題について見ると、国民生活に密着する衣食の点でも、日華事変が始まって以来、日毎に窮屈になって行った。そうした困難な時に於いてさえ政府は、戦争の悪化を隠蔽し、国民に最後の勝利を信じさせながら、「ほしがりません勝つまでは」という、まことに都合のいい標語を与えた。

十九年六月十九日、マリアナ沖の海戦でわが空母の大半を失ったのをきっかけに、七月七日にはサイパン島の日本軍が全滅して同島が米軍の手に落ちてからは、敵の行動範囲がにわかに拡大し、本土侵攻の可能性がいよいよ濃厚になって来た。軍需物資の貧困が目立って来ると共に、人的資源に対する軍部の要求も益々苛烈になって来た。

こうなると最早前線と後陣の区別がなくなり、一億一丸火の玉となって戦争に突入するより仕方がなくなったのである。国民は、直接間接を問わず戦争に捲き込まれて行った。已に十八年中期ごろから、戦争に国民を動員する法令が相ついで出されていたが、それもサイパンを占領されてからは、日増に厳しくなっている。

それにも拘わらず戦局はいよいよ利なく、遂に沖縄にも米軍が上陸し、わが咽喉首に剣を擬して最後の決断を迫って来たから、小磯内閣は施す手なく政權を投げ出してしまった。そして次期首班に推されたのが侍従長鈴木貫太郎海軍大将で、「本土決戦」「一億玉碎」を口にしたが、胸中ひそかに終戦を期し、その時期を待っていた。これは重臣連中に共通した考えで、天皇制が維持出来れば、ポツダム宣言受諾もまた止むを得ないとする空気が見られ、近衛文麿の如きは、二月以来ソ連の仲介によって国体護持を条件で戦争終結を実現せんと努力したが、ヤルタ会談で好餌を約束されているソ連は、仲々これに応ずる気配もなく、却って対日宣戦を布告し、これと前後して、二個の原爆が、広島、長崎を焦土と化し、前者では四十四万、後者では十五万の死傷者を出して、日本殲滅の威力を示し、建国以来不敗を誇って来たわが国史に無条件降伏の一頁を加えて終戦の日を迎えたのであった。

十九年末から二十年にかけて、一大攻勢に転じた米国は、殆んど隔日毎に本土を空襲して来た。始めは「アメリカの定期便」と称して左程恐れを感じなかったわが国民も、二十年に入って東京都が爆撃されるようになってからは、東京都民は勿論のこと、全日本国民も安閑としてはいられなくなった。そうして度重なる爆撃により、都の大半が焼き払われて焼野原と化し、丸善の社屋も、その系列工場、倉庫、営業所などと共にほとんど灰燼に帰したのであ

った。今、太平洋戦争四か年間に於ける丸善の業態を語る前にその被害の状況を挙げて見ると次の通りである。

本社並都内各附属機関被害一覧表

名 称	所 在 地	年 月 日	被 害
第一別館	日本橋区江戸橋二ノ九	昭二十年三月十日	全焼
第二別館	日本橋区通二ノ六ノ六	昭二十年三月十日	全焼
昭和別館	日本橋区江戸橋三ノ二	昭二十年三月十日	全焼
文具倉庫	日本橋区通三ノ二	昭二十年三月十日	全焼
文具別館	日本橋区江戸橋三ノ二	昭二十年三月十日	全焼
角倉庫	日本橋区江戸橋三ノ三	昭二十年三月十日	全焼
日暮里工場	荒川区日暮里三ノ七七七	昭二十年四月十三日	(原料倉庫焼残る)
本館	日本橋区通二ノ六ノ二	昭二十年五月二四日	(三月十日の空襲で焼残った が強制疎開により建物解体)
早稲田出張所	牛込区早稲田鶴巻四四〇	昭二十年五月二四日	全焼
荏原工場	荏原区平塚六ノ一〇〇四	昭二十年五月二四日	全焼

支店・出張所等被害一覧表

名 称	所 在 地	年 月 日	被 害
大阪支店	大阪市東区博労町四丁目	昭二十年三月十四日	全焼

名古屋支店	名古屋栄町三ノ五	昭二十年三月十九日	一部焼失
横浜支店	横浜市中区弁天通二ノ三四	昭二十年五月二九日	全焼
神戸支店	神戸市神戸区元町通一の六三	昭二十年六月五日	全焼
福岡支店	福岡市上西町一八	昭二十年六月十九日	全焼
仙台支店	仙台市国分町一六八	昭二十年七月九日	一部被害
長崎出張所	長崎市鍛冶町乙四一	昭二十年八月九日	管理権委任
京城支店	京城府本町二丁目	終戦直後	接収
新京出張所	新京特別市梅ヶ枝町一ノ一二	終戦直後	接収
奉天工場	奉天市大和区八幡町一	終戦直後	接収

二 洋書輸入の努力

この様な状況下先ず洋書輸入業務に就いていえば、已に昭和九年四月、国際文化振興会が設立されるにあたって、民間から三省堂、北星堂、教文館及び丸善がこれに参加し、世界の文化交流に寄与するため、主として斡旋の勞をとったのも、その使命感を達成しようとしたからであった。だからこそ日華事変勃発後は、欧州方面に、考古学・東洋学及び學術文献を、ソ連へは學術文献以外にわが国で発行されている各種の新聞雑誌を、米國へは法律書、經濟書、古典文學書を多く輸出して東洋の事情を紹介すると共に、わが國情を広く世界に認識させようと努力した。勿論これと併行して欧州諸國から、自然科学書を主とする新古の書籍の輸入もあらゆるルートを利用して輸入し、好學者たちの便宜を計り、大いに重宝がられていた。しかし昭和十六年六月、独ソが開戦すると、間もなくシベリ

ヤ鉄道の利用も困難になり、ドイツの技術書や文献は、船舶による遠廻りな輸送路を經由して、ようやく輸入されるという状態であったことは既に述べた通りである。殊に太平洋戦争が勃発するに及んで、米・英と国交が断絶してからは、米・英・仏等の書物の輸入は勿論のこと、ドイツからの輸入さえ、殆んど絶望状態に陥り入った。しかしわが国が当面の敵である、先進国のアメリカに勝ち勝つ為には、是非共欧米各国の事情を知り、特に軍需工業を盛んにするためには、理工学関係の文献を海外から取りよせ、これを基としてあらゆる創意工夫を結集しなければならなかった。こうした大きな矛盾を抱えた軍部は、その悩みを解消するために、是非共民間洋書輸入業者の手を借りなければならず、過去に多くの実績を持つ丸善が先ず選ばれてその秘命を承けた。この事はこれまで余り明らかにされていなかったが、幸い此の衝にあたった輸出部参与石川実が、洋書第一課長田辺寛との対談で、その全貌を明らかにしており、一部は已に前章に引用しておいたが、今茲にそれに続く秘録を再録して、当時丸善が歩んだ苦闘の跡をたどって見よう。

石川 さて来ないとなったら軍部当局などが非常にあわてたのですね。戦争遂行上いろいろなものが欲しい、何を作るにしても第一番に本が必要だといわれ、なんとかして取りたいという気持から僕が命令をうけて南方へ派遣されることになった。

田辺 それは昭和十七年の十一月ですね、実際にはあれは集まったのですか。

石川 情報局から何か方法はないかと云うのでジャバにオランダのいろいろな調査研究機関があって、いろ

いろいろなものを出版していた。また本屋もジャバに、コルフ、バン・インゲン、バン・ドルフ (Kolf, Van Ingen, Van Dorf) また上海、シンガポールやマニラ等にまだあったのですよ。

田辺 仏印にもありましたね。

石川 そう、そういうものが狙いですが、もう一つは占領地域に於ける大学の図書館とか、科学図書館とか、その他の図書館があるし、そういった図書館などがどういう風に管理されているかということも情報局としては知りたいということで、ひとつ行ってくれないかという話があったのです。会社の方では僕と上住さんということになったのです。ところが丸善だけでは少し具合悪いということで、三越の玉井さんを一緒にということです、業者から三人、それで情報局の鈴木謙介情報官と一緒に南方諸地域に出かけました。

田辺 何で行かれたのですか、船ですか。

石川 東京から福岡まで汽車で行って、福岡から飛行機でまず台湾に行って、台湾から香港、海南島の海口に寄って、それからサイゴンまで行った。サイゴンで二つに分れたのです。玉井さんと上住さんは仏印、タイとシンガポール、マレー、僕らの方はシンガポールからインドネシア、フィリピンということだったのです。十一月三日に東京を出発した。やはり行ってみるいろいろなものがありましたよ。上住さん達はハノイで蒋介石の蔵書を軍が保管していて、それを整理して書き出した。とにかく一か月間かかったということです。それを軍の指図で日本に送るという手配をして来たのです。しかしとうとう着かなかったらしい。相当な分量だったらしい。上住さん一行はそれからもう一度サイゴン、マレー、ユエからサイゴンに移って、今度はタイへ



シンガポールの街（共同提供）

行った。タイはそんなにないのです。それからシンガポールへ寄って、シンガポールでも同じような調査をして、いくらかは送るようにしたようです。そこまで良いのだけれども、どうもそれだけでは物足りないというので僕らのところを廻って帰って来たのです。僕の方は鈴木情報官と一緒に先ずシンガポールの軍政管部に行って、あとからこういう者が来るからよろしく頼むとお願いしてそれからジャバへ飛んで、バタビヤ（現ジャカルタ）に本拠を置いたわけなのです。当時バタビヤから少し離れた処にバイデンゾルフ（現ボゴール）という町があり、そこに世界の三大植物園の一つという素晴らしい植物園があり、その近くの林業、農業、自然科学等の研究所や附属図書館を視察し、それらの研究所から出版されていた資料、それを全部管理しているのは軍ですから、そういう処にお願いして都合のつくものだ

け頂戴して、それからバンドンへ行ったのです。バンドンにもいろいろな研究所があるのです。あそこで一番大きいのは鉱山総局です。その中央図書館には二十五万冊の蔵書があり、非常に大きく素晴らしいものです。

最も驚いたのは資料で、蘭領の各島々、ボルネオ、ニューギニア、其の他の島々、そういった処の鉱山関係の調査報告が、ずらりと大きな書庫の中に整然と並んでいるのですよ。こういう資料は軍としては絶対に大事なものに違いなかったんです。他に地質研究所、材料試験所、キナ研究所等々いろいろ研究所がありました。それぞれの資料がありましてきちんと整理されていて偉いなあと思いました。

田辺 オランダでしょう。

石川 バタビヤにも博物館、それに研究所が多数ありいろいろ研究書や調査報告が出されていた。厚いものもないではないが、パンフレット形式が多かった。それもだいぶ戴きました。そういうものを集めて全部で木箱二十箱ぐらい送りました。

田辺 大変なものですね。

石川 コルフその他いろいろな本屋がありましたね。そういうところのものも買ったりなどして内地へ送りました。それから鈴木さんは十二月にバタビヤから直接帰国され、あと一人残ってジャワの各地を廻り、マッカサル、ダバオを通じてマニラへ行った。マニラで一番大きい図書館は、国立図書館(National Library)蔵書数百万と云われていました。そのうち比島、東洋関係だけで蔵書六万といわれていました。次は科学局(Bureau of Science)の科学図書館、蔵書三十五万冊とのことでした。それからここにフリーメーソン(Free-

mason) の支部のメソニック寺 (Masonic Temple) があり、その図書館にも相当の蔵書があり、海軍の管理になっていた。このフリーメーソンのものは役に立つ物はなかった。Protocol (調書) 等が多かった。本屋で戦前取引のあったのは、フィリピン・エデュケーション (Philippine Education Co.) でしたね。

田辺 フィリピン・エデュケーション、あれは大きな本屋ですね。

石川 マニラで一番の繁華街であるエスコルタ街にあるのですよ。そういう店へ出かけて行ってこれと思う本を出して貰ってそれを持って来ました。自分でも少し持って来たものもあります。そういうものはいぶん役に立った。

田辺 目録などはどうでした。

石川 目録は入手出来るものは入手し、場合によってはリストを作って送りましたがね。ところが全部着いたか着かないかわからないのです。情報局宛に送ったのですが。

田辺 それは戦争が激しくなりましたので。

石川 それで着いたあとで焼けてしまったのか、またどういう風に処分されたかわからない。とにかく一応お役に立ったというので非常に喜んでいただいた。(後略)

以上が秘話の要領であり、文中に現地で蒐集した書籍が、日本に送られて来たかどうかは不明であると述べている。しかしこの頃は未だ戦争もそう烈しくなかったから、戦争物資を現地に届けた輸送船が、殆んど空のまま日本

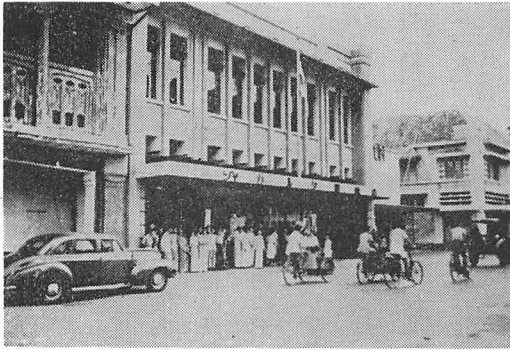
に回送されたと考えられるので、或いはその中のいくらかが情報部宛に送られ、梱包を解かないままその倉庫に収納されたのかも知れない。

三 バタビヤ進出

それは兎に角として、こうした企ては、少なくとも二つの面で、商売上の寄与をした。即ちその一つはオランダ領地域への進出であり、その二つは海外視察員の派遣である。

初め軍部は占領地域の治安が維持されると、先ずその地域内に書店を設けることを案出し、その協力を日本出版配給会社に求めて来た。そうして昭和十七年五月陸軍次官の指令によって、三越、三省堂、金文堂及丸善が特に指定され、占領各地に店舗を設けることになった。この指令に従い丸善はバタビヤに開店したき旨を申出で、直ちにこれが認められた。尚、これと同時に三越及び三省堂は昭南市（シンガポール）に、金文堂はスラバヤに開店することも決定した。

さてバタビヤには、已に石川や田辺が馴染のゴルフ書店があった。この書店はオランダ人が経営していた店で、主として書籍、文房具、玩具、陶器、電気器具（シェード等）、婦人雑貨などを販売し、スラバヤ、バンドンにも



ジャカルタ書籍店

支店を持ち、別に完備した印刷工場をも経営する一流の書店であった。そこで丸善では同店の一部を借り受けて開業することになり、昭和十八年五月に、佐久間庸を店長に任命し、これに四名の社員を現地に派遣した。一行は同年七月九日にバタビヤに到着し、いろいろ準備のために手間取り、十二月一日付を以てようやく開店した。経営の目的はいうまでもなく、国内の刊行物を占領地区に重点的に配給を行い、わが国の文化を現地に浸透することにあつたが、この事業は丸善の直営とせず、独立採算制をとった。従つて店名も丸善の称号を用いず、ジャカルタ書籍店と呼んだ。経営は順調に進み、日成らずしてコルフ書店全部を借り受けると共に、文房具、玩具の販売など、コルフ書店の事業を継承し、更に雑貨、煙草などをも販売し、また配給品をも取扱つた。何しろ軍の後援を得ている上に、佐久間店長以下社員は、よくその販路を拡張し、これと同時に丸善株式会社の看板を掲げた木工場、紙工場、鉛筆工場の三工場をも経営するようになったから、人手の不足を感じ、本社から派遣員四名を増員することになった。勿論これらの社員は指導層で、店員は、旧コルフ書店員を全員雇ふると共に、技術者、工員には現地人、中国人、オランダ人などを採用して仕事に当たらせた。然し戦争が烈しくなり、本土との連絡や、物資の輸送に事を欠くようになってから、現地で生産される資源を生かした文房具の製造や、また現地に残存する書物や文献を集めて顧客の便宜を計るなど、名実共に自給自足の体制を取り、孤立無援の中にありながら、派遣の目的を完遂し、内外人から信頼と好評をうけた。しかし終戦はこの事業にも終止符を打ち、ジャカルタの諸事業は連合軍に接收されたため、派遣社員全員は二十一年五月頃相ついで無事帰国した。

四 海外視察員の派遣

次に海外視察員派遣の件であるが、太平洋戦争勃発当時、東京には官庁、会社、銀行等の首脳者を会員とする専門図書館協会なるものが設けられていて、専門的な研究資料を集めて、これを会員に配布し、知識の向上に寄与していた。この会は戦争が進むにつれ、文献を入手することがいよいよ困難になるのを痛感し、積極的に蒐集運動を起して、欧州に海外視察員を急派し、その事業達成を計った。

このため丸善に対してその協力を求めて来たので、仙台支店長中村春太郎を推薦した。中村は同協会々員並に外務省嘱託の資格を得、急いでドイツに向って出発したが、この時派遣員として同行したのが、外務省調査第一課の菅良と文部省事務官犬丸秀雄の二人であった。

彼ら三人は十八年二月二十五日に東京を出発し、シベリヤ鉄道を経て中央アジア線（トルクシブ線）に乗り換え、終点クラスノブオドスクから連絡船でカスピ海を渡り、対岸のバクーから再び鉄路を利用し、トルコ、ブルガリヤ、チエコスロバキア、ハンガリーを通り四月二十三日にドイツの首都ベルリンに入った。中村は到着後直ちに作業を始めたが、已に同年二月のスターリングラードの戦に敗北したドイツは、反撃作戦を練っている際とて、極端な統制が実施されていたから、資料の蒐集は極めて困難であった。その上六月十日には米・英連合軍の対独攻撃が始まり、七月二十四日のハンブルグ大爆撃をきっかけに、八月二十三日のベルリン空襲に引きつづき、ドイツ国内には異常な混乱が相次いだので、中村の活動は全く阻止されてしまった。そこで活動範囲を拡大してバリ及びストック

ホルムまで足を伸ばしたが、ここもまた間もなく戦場と化し、更に転進してイタリー、スペイン、ポルトガル、イス等に入らんとしたが、ここでもまた入国拒否にあった。

かような状態にあって、米・英・ソ連などに完全に包囲されたドイツ国内には、益々敗戦の色が濃くなり、昭和二十年五月七日ついに連合軍の軍門に下ったため、邦人全部に強制帰国が命じられ、中村は大使館の残留館員と共に、二十年五月二十日ベルリンを立ち、シベリヤ経由で六月二十五日帰国した。

中村の思い出話によると「集めた資料の中で緊急に回送したいものがあっても、殆んど交通路が閉鎖されていたから、止むを得ず、軍部に頼んで潜水艦に載せさせてもらったが、その艦が途中で撃沈されたものか、とうとう着かなかった。」と云う。帰国の時には勿論蒐集した資料を携帯することは無理だったろうし、また許可されなかったから、取りあえず、ベルリン市内の日本大使館地下室と、ノイルピン市郊外の日本大使館分館と、アイゼンベルグ市のケーレル・ピアノ工場地下室の三か所に分散して保管を依頼したが、わが国もまた敗戦したとあっては、これを回収する手段が全くなかったのは甚だ遺憾である。

しかしかような混乱と硝煙の中に使命達成のためとはいえ、生命をかけて異国の空を駆け巡った彼の活動は、定めし会う人ごとに深い感銘を与えたらうし、丸善の名声を欧州各地の関係者に印象づけた功績は、実に偉大なものであった。中村の帰朝談の中には、自分の功績を誇ることなく、ただ丸善の二字が如何に知られていたかと述懐した一節があるので、左にこれを紹介しておく。

書籍に關しての訪問先に於ては丸善の名を知らざる所殆どなく、而かも信用あり立派な本屋だそうだという

添言さえも聞いたところ二、三に止まらない。それが出版書肆のみではなく、小売店に於ても耳にし得たのは心強き限りであった。一例を挙げれば、ストックホルム市のフリッツ書店（英・米・仏・独の書籍を少数取次ぎ販売す）に於て又同市のノルデイスカ書店（外国書陳列）に於ても丸善を礼讃し、後者店の白髪の支配人は、戦前丸善を訪ねたこともあり立派であったと話し、又トルコのイスタンブールの古書店（小店にて女主人経営）に於ても嘗て丸善と取引があったと語る程であった。

戦時中の洋書販売には以上のような苦勞があったが、それでも丸善の名にかけて蒐集した洋書類は、「学鑑」を通じて紹介販売されていた。しかし、流石に時局色の濃いものが多かったのは否めない。十六年十二月号には、天野敬太郎が「東西及南方共栄圏の文献目録」と題し一文を寄稿し、十五年度の関係書籍和洋両文五十八冊を挙げているが、これらを通覧して見てもその感を深くするものがある。